

2016 Jikji International Road Race レポート 第5ステージ

2016-0520 発信

大会5日目、最終ステージ。

第4ステージ終了後は自転車で4kmほど移動し、昨日と同じホテルに入る。昨日同様近くの食堂へ行き昼食。出来るだけ消化の良いもの（麺類）を摂り、その後はカラダを休ませる。選手個々にチームの動きの中で、自分のペース、1日の流れをつかんでおり無駄な動きはない。翌日は最終日につき、自転車のパッキング、移動SKD等、レース以外のこともあるので、イメージづくりを指示し、部屋に戻る。

スタート地点は昨日と同様につき問題なし。気温が30℃を超える予報につき、スタート地点に移動前にコンビニに寄り、アイス（氷）を調達し補給に備えた。

本日の第5ステージで長かったスケジュールが終了する。個人総合、チーム総合の入賞は現実的には厳しいが、まだチームとして見せ場を作れていないので、まずはチーム絆、日本チームで協調して、個人、チームのステージ表彰を目指すことを確認し、スタートした。

最終ステージも、選手のレポートを中心に掲載する。

<選手レポート>

栗原 悠（千原台3年）

自分でも驚くくらい、元気で調子が良かった。序盤からチェックにはいれたし、所々ではアタックも出来た。

中盤に大きな登りがあった。先頭はなかなかのペースだった。これは決まると思い先頭に追いつき登った。花田君もいたので行けると思った。しかし、下りが終わるとまた一つの集団に戻った。そのまま終盤を迎え、2名の選手が逃げた。

集団のペースアップでその2人を吸収したと思っており、最後のスプリントいけると思ったが、韓国の選手は強かった。

ここ2、3日の感触では、「もしかしたら自分も最終スプリントでも勝負できるかも」と喜んだが、勘違いだった。本当のパワーの差を見せつけられたゴールスプリントだった。

この韓国遠征を通していろんな意味でとても良い経験になった。日本語が通じない環境での生活や他国の選手と日本の違い、レース展開の違い、走り方の違いなど多くのことを学べた。本当に参加させて頂いて良かったと思う。

そして今日、成海君が個人3位、チームでも3位になれて嬉しい。しかし、優勝するという気持ちでこのレースにのぞんできたので、個人で何も結果を残せずに終わったということに悔いが残る。その悔いを晴らす機会が明後日に県の高校総体があるのでぶっつけてやろうと思う。



満田 光紀（千原台 3 年）

今日のコースは上りがいくつかあったがほぼ平坦コースで、100km ほどの距離だった。レースは 9:30 から始まり 2km ほどパレード走行の後、解除されリアルスタートした。スタートしてからはアタックも少なく集団のまま走っていた。自分もアタックに加わったが逃げるのができず集団で走っていた。中盤の上りで何回か集団から離れたが平坦で追いつき最後のゴールスプリントまで参加することができた。ゴールスプリントは、いいポジションで最終スプリントに入ったが、最後は力尽きてしまった。

今回の大会では個人の結果を出すことができなかった。今後の課題が見つかったので日本に帰ってから今回の大会を無駄にしないよう頑張る。



相葉 健太郎（九州学院 3 年）

今日のレースは最後まで集団に残り、ゴールスプリントをすることを目標にした。今日は逃げが決まりにくいだろうという予想だったので、ちぎれないようにして、最後のゴールスプリントで勝負しようと思っていた。きつい登りが 2 つあった。どちらの登りもちぎれそうになった。登りが見えたら前の方に出て、下るときには集団の一番後ろになっていた。平坦では 1 列になるほど速かった時もあった。人の後ろについているだけで平坦の速い時は楽についていた。最後は逃げられそのままゴールされたが、集団でゴールスプリントができた。大集団で 4 番だったが、いい経験ができたと感じた。



佐藤 健（九州学院 2 年）

今日、最終ステージの出走も 9:30 だった。今日のコースは昨日と同じスタート地点から第一、第三ステージを通った道を逆走し、チョンジュ市に帰る 100km。途中 3 つの峠を越える、第一ステージと並ぶ山岳コース。

今日はレース開始後の集団は怖いくらい平和で、まともなアタックがほとんどなかった。

1 つ目のポイントは 20km 前後の 4km ほどの峠で、その時点でまだ集団が 1 つのままだったため、その峠は少し速めのペースで登った。下りで集団が少し減り、そこから 35km 回り(明確ではない)まではペースだった。その少し前に 2~3 名の逃げができればしく、30 番台、110 番台のチームが集団を抑えていた。

しかし、120 番台のチームがペースを上げて行き、45km 回りの峠ではペースがあがり、逃げも吸収された。

それをきっかけに集団ペースは上がり、頻繁にアタックがかかるようになった。

しかしどれもなかなか決まらず、残り 15km の 85km 回りで 31 番選手が 1 人で飛び出し、逃げの体制に入った。



それに 134 番選手がブリッジをかけ、2 名の逃げができた。

60 番台、120 番台のチーム(その時点でチーム総合 1,2 位)が中心となって集団のペースを上げていったが、逃げた 2 人は視界から消えた。残り 10km 前から 61,63,64,124 の 4 選手と僕の 5 人がメインとなって集団を引き、残り 5km 辺りから栗原君、成海君の二人が集団に揺さぶりをかけ、残り 2km からは位置取りが始まった。

残り 1km ほどまで集団の内側に呑まれていたため、集団右端に移動(成海君の後ろ)し、フィニッシュアーチが見えたゴール 400m ほど手前からかけだし、集団の 7 番手辺りまでいったが、そこから少し垂れ、数名に抜かれた。それと同時に僕の後ろに付いていた成海君が僕を発射台にして飛び出し、集団トップでゴール。

僕はタレながらも、他の選手を抜き、恐らく集団 10 位くらいでゴールした。

結果、成海が個人 3 位、チームがステージ 3 位となった。僕自身の順位はあまり良くなかったが、最終ステージでチームメイトが表彰台に立ち、また、僕は全ステージを完走することができた。

残念ながら満足のいく結果は出せなかったが、この 5 日間で身体面、精神面共に大きく成長できたと思う。

また、日本と海外のレース、競技力の差も感じる事ができた。

今回の韓国遠征は、確実に僕のこれからの競技人生の糧となるだろう。2 日後には県総体が始まるが、韓国での経験を活かして勝利を掴みたい。

花田 凱成 (祐誠 3 年)

今日のレースは昨日と比べ序盤は、ゆったりした感じだった。道が狭くなったりした。登りになるとアタックがかかるが、決定的な逃げは決まらなかった。中盤になり少し長めの登りになると人数が絞られてくる中、また、アタックがかかったので栗原君と逃げにのるが、これも決まらず吸収された。

終盤になると、アタック合戦になるが韓国人選手二人が先行し、それを集団が追う形で最終局面を迎え、ゴールは集団のスプリントで終わった。ラスト 5km 過ぎに集団が牽制状態になったので、一人でアタックを試みたが、すぐに吸収されてしまった。これからは、一人でも逃げきれる、独走力を磨きたい。



成海 大聖 (普天間 2 年)

今日は最終日。バイクチェック後昨日のように 30 分しっかりアップを行い、スタートに備えた。

今日のレースは序盤の細かいアップダウンでアタック合戦がおこる事を想定。また、道が狭くなったり、トリッキーな下りがあったりしたため集団前方で動く事が 1 番重要であると考えた。

9 時 30 分にレースはスタート。いつものように 2、3 km のパレード走行を終え、リアルスタートが切られた。

予想とは違い各チームのアタック合戦はなかった。日本チームは集団



前方で様子を見ながら、集団の前方に位置し、メンバーみんなが冷静に走っていた。60 キロ地点まで集団のペースでややゆっくりとレースは進んだ。途中 3 回勾配のきつい坂を登った。平坦を前で走っていた韓国人選手は登りの中腹ではズルズルと位置を落としていった。

パワーがすごくスピードがある韓国人だが登りはそれ程強くなかった。一部の登れる韓国人や WCC の選手がペースを上げる中、日本チームは きつい登りをこなした。

レース終盤にアジア選手権個人追い抜きのチャンピオンとそのチームメイトが 2 人で逃げた。それには集団も反応せずどうせ追いつくだろうと追わなかった。

僕もそう思っていたため、最後のゴールスプリントで日本チームの誰かを勝たすための動きをはじめた。

ペースアップをしたり、小さな登りでアタックを仕掛けたりと、先頭を引く各アシストの脚を使わすように走った。

それをラスト 2km まで続け、ゴールスプリントに備えた。

ラスト 1km で集団前方に栗原君、相葉君がいるのを確認し、集団中ほど様子を見ていた。

すると、右から佐藤君が上がり、その後ろにうまくついた。そのまま佐藤選手は集団の先頭まで上がったところで僕は踏みはじめた。登り基調で僕の得意なシチュエーション。昨日落車でスプリントに絡めなかったのでチャンスが来たと思い、全力で踏んだ。

集団のトップをとり、全体の 3 位だった。自分のスプリント力がこのトラックに力を入れている韓国に通用した事がとても自信になり、いい経験ができた。今回表彰台に登れたのはチームメイトのサポート、引率の先生方のサポートがあったからこそ成し遂げられた。チームで走る素晴らしさを知った。今後も海外のレースに出場するので今回の経験を活かし、自分の力と世界との差を知りたい。

また国内のレースでは少しでも多く海外で走れる力を持った選手が育つように、今回経験したレース展開を作っていきたいと思う。

この 1 週間、スタッフとして改めて何かを指導したと言うよりも、選手の自発的な発言や行動を引き出すようにスタッフ一同心掛けた。遠征中盤を折り返した辺りから、選手たちの成長が感じとれるようになった。選手として何を考え、どう行動するべきかを個々とチームで考え行動するようになった。

結果に対する満足度はまちまちだと思うが、アジアとはいえ、日本とは違う環境下での生活、レース活動は彼らの今後の活動に大きな影響を与えると思う。

レースなので勝利を目指すことは大切である。しかし、ジュニア期の活動は、その勝利へのプロセス、すなわち「経験」をどれだけ積ませてあげることができるかが、以後の活動へ大きな影響を与える。

私自身も地震直後ということもあり、今回の遠征に対し消極的な部分があったが、選手たちの頑張りや成長を見て、元気をもらい、参加して本当に良かったと感じている。

今回の遠征に際して、多くの関係団体、所属校ほかのご理解、ご支援を頂きました。心より感謝するとともに、今後もこの大会への参加が継続して実施できるよう願っています。

文責：中田（全国高体連自転車競技専門部）

最終日、スタート地点、前日表彰風景



選手、スタッフ朝食



補給準備、サポートカー荷室



ゴール後の様子、3着通過の成海君のギヤチェック対象



セレモニー風景 左：個人、右：チーム



セレモニー終了後→ソウルへ移動 福岡空港にて解団式

